

平成21年8月12日 於：山口市湯田温泉 ホテルニュータナカ

第8回 総会・懇親会開かれる



第6回総会と同様、鴻理会と合同開催しました。

総会・公開講演会を終え、丸本学長、湯川人文学部長を囲んでの記念撮影です。



第 29 号

発行・鴻文会

山口大学 文理学部文文学科・
人文学部・大学院人文科学
研究科 同窓会

(連絡事務所)

〒753-0831 山口市平井773-2
沖田ビル202

電話・FAX 083-928-4527

郵便振替口座 01500-4-15902

http://

homepage3.nifty.com/koubun/

メール：fycsf998@ybb.ne.jp

新会長挨拶

ご挨拶に栞を添えて

会長 岡光一浩



鴻文会の会員
の皆さまには、
ますますご健勝
にてご活躍のこ
ととお慶び申し
上げます。この
たび、八月の総
会において、二
〇一三年八月ま
での四年間、会

長を仰せつかることになりました。文理学部文
学科第一四回ドイツ文学の卒業です。三〇年近
く母校に勤めさせていただいた後、自遊人さな
がらの生活をしておりましたが、このたび、ご
縁がありまして、会員相互の親睦と母校の発展
のために少しでもお役に立てればという思いで、
会長をお引き受けることにいたしました。し
かし、未だ普請中、何分、何事につけ微力です
ので、優秀な役員諸氏の強い協力をいただきな
がら、鴻文会の発展に尽くして参りたいと思ひ
ます。

さて、皆さまもご存じのように、鴻文会は人
文学部が発足して三年後の一九八一年一〇月、
それまでの文理学部同窓会を発展的に解消し、
文理学部文文学科・人文学部卒業生と大学院修了
生を正会員に、人文学部学生と院生を準会員に、
文学科旧教官と人文学部教官・旧教官を特別会
員にして結成され、その名は、大鳥のごとく將
来雄飛する期待を込めて、山口市の由緒ある鴻
の峯の名を拝借し、旧制山口高校同窓会鴻南会
の精神を継承すべく、「鴻文会」と名づけられま

した。爾来、本同窓会は今年の一〇月で二九年
目を迎えることになり、約七五〇〇名(正会員
六五八八、準会員八二二、特別会員九六)に
ものぼる会員を擁する組織に発展いたしました
ことは誠に慶賀に堪えません。初代・和田敏英
会長のもとで創立当初から鴻文会の運営に携わ
ってきた身としましては、まさに感慨もひとし
おです。これも、ひとえに皆さまのご協力・ご
支援の賜と改めて感謝いたす次第です。

本同窓会はこれまで、会則どおり、会員相互
の親睦と人文学部や大学の発展に寄与すべく様
々な活動を行って参りました。具体的には、年
一度の会報の発行や名簿の作成(現在中止)、
四年ごとの総会、年数回の役員会、そして山口
大学同窓会理事会への出席などの会員相互の情
報交換や親睦のための事業活動であり、人文学
部学生の就職支援や大学院に在籍する留学生へ
の奨学金の授与、人文学部玄関口の記念植樹、
様々な寄付などの学部・大学に対する支援事業
であります。しかし、昨年、こうした活動も難
しいものになりつつあります。それには様々な
原因があるかとも思いますが、それは最大公
約数的に言えば、会員の、それも若い会員の連
絡先不明の多さに起因するよう思われます。
早急に、正会員の連絡先不明者の数(約二三〇
〇、三五%)を減少に向かわせる手立てを考え
る必要に迫られています。個人情報保護の問
題もありますので、これもなかなか難しいこと
です。現状では、正会員・特別会員の信頼によ
る協力を仰ぐことしかないように思われます。
総会の出席者の減少、会報の返送の多さ、役員
や学生のための就職支援者の確保の難しさ、寄
付等による支援事業の困難さなどに歯止めをか
けたい、それが会長として望む最初の大きな事
柄です。ぜひ、会員お一人一人のご協力・ご
支援をよろしくお願いいたします。

もうひとつ、「同窓会」というものについての
私自身の思いを述べさせていただきます。「なぜ、
同窓会か」それは、同窓会が閉塞感に覆われて
いる現実社会の中で私たちが勝ち得るのとは違
ったレヴェルの達成感・幸福感を与えてくれる

ものであるからです。人間は人間らしく生きるために、必然的にバランスを欲するものです。それゆえ会員の皆さまに向けて、とりわけ、遠くで活躍の卒業生の皆さまに向けて、青春の時期を過ごした山口の地と山口大学にどうぞ「おいでませ」、ここにはひよっとしたら人生にとってオアシスとなるかもしれないものがあるかもしれません、と申し上げたいと思います。また、同窓会の学部への寄与・貢献にもバランス感覚が必要でしょう。学部自体がなし得るのとは同じでない、あるいは、学部がなし得るのが困難な、そうした、学部とは違った発想レベルで寄与・貢献をすること、それが同窓会の学部への寄与・貢献だと私は考えています。同窓会が会員相互の親睦と母校の発展への寄与・貢献を言うとき、それは、同窓会自体がもつ立場や特徴を逸脱したものであってはならないはず。甘いと思われるかもしれませんが。なにしろ、リタイアして少々時間が経過し、世間に対する感覚が鈍り、様々な社会の流れに無頓着になっていくところが多々ありますから。でも、生きることは夢を、希望を、理想をもち考え続けること、言い換えれば、自分の「物語」を作ることであることは確かです。私は、鴻文会が人間的なものに重きを置いた、ルネサンスの風を巻き起こすものであることを希求しています。

二年後の二〇一一年一〇月には、鴻文会が設立三〇周年を迎えます。この節目の時期に会長を務めることになりました私は、新たな熱き思いで、鴻文会が会員相互の親睦と母校の発展に寄与し、人文学部と卒業生とを繋ぐ窓口となるよう、最善を尽くす所存しております。最後になりましたが、皆さまの変わらぬご指導・ご支援を重ねてお願い申し上げます。皆さまの「健康とご発展を心からお祈りいたします。」(追記) 本役員会が発足当初から深く取り組んでいきますのに、会報とホームページの充実・刷新があります。女性四名を中心に、女性的感覚を前面に出した斬新で魅力あるものに生まれ変わろうとしている「鴻文」、学部の村田先生のご尽力により、新たな構想をもつその魅力的な姿を着々と現しつつある鴻文会のホームページ、

第八回 鴻文会総会・懇親会報告

副会長 宮藤 隆 夫

ジ、いずれも、会員の皆さまのご期待に添えるものになりそうです。ご覧いただき、ご要望・ご意見をぜひいただきたいものです。
(文理解第一四回卒・ドイツ文学)

第八回鴻文会総会並びに懇親会は、平成二二年(二〇〇九年)八月二日(水)、初めて会場を学外に移し、山口湯田温泉ホテルニュータナカで開催されました。

今回の総会は、従来五年ごとに開催されていた理学部同窓会(鴻理会)が、平成一八年の総会において開催時期を今後三年ごととすることが決定されたため、第六回の総会と同様に鴻理会との合同開催となりました。

総会は、午後一時から県外からの出席者を含む会員約四〇人が出席し、私、宮藤が開会の辞を述べ、宮藤の司会進行により総会行事が進められました。

最初に、大野光生会長が会長あいさつを行い、続いて、鴻文会名誉会長である湯川洋司人文学部長のあいさつの後、議長に立川和正副会長を選出し議事に入りました。

議事は、まず、本田義昭副会長が「事業報告」及び「会計報告」を行い、北川健監事の監査報告、会員からの質疑を経た後、「事業報告」、「会計報告」が異議なく了承されました。

続いて「役員改選」の議事に移り、本田副会長により新役員(案)が提案され、岡光一浩新会長以下別掲の新役員が選出され、今後四年間鴻文会を運営する新役員体制が決まりました。最後に、岡光新会長が、会長就任に当たって同窓会運営に対する所信を表明し、総会は無事閉会しました。

総会終了後、午後二時から公開記念講演会が

開催され、最初に、鴻文会会員で消費者行政推進会議委員の原早苗氏(昭和四八年文学学部文学専攻科卒)を講師に迎え、「消費者庁・消費者委員会発足が問いかけるもの」と題する講演が、続いて、鴻理会会員で本田技研工業株式会社副社長の近藤広一氏(昭和四五年文学部理学科卒)を講師に迎え、「ホンダのグローバル経営」と題する講演が行われました。原氏の誠に時宜を得たお話、近藤氏の大変興味あるお話に、会員はもとより一般市民の方も熱心に耳を傾けていました。

公開記念講演終了後、鴻文会、鴻理会それぞれでご来賓や特別会員とともに記念写真撮影し、その後、午後四時半から合同の懇親会が行われました。

懇親会は、鴻文会立川副会長、鴻理会野崎学内委員の合同司会が始まり、鴻文会、鴻理会双方の会長のあいさつに続き、丸本卓哉学長の祝辞をいただき、鴻理会の加屋野新会長の乾杯の音頭により出席者一同杯を高く掲げ、祝宴に入りました。

鴻文会としては四年ぶり、鴻理会としては三年ぶりに開催される懇親会であり、お酒が進むにつれ歓談の輪も大きくなり、久しぶりに旧交を温める光景があらこちらのテーブルで見受けられました。

懇親会の途中では、湯川人文学部長や田中理學部長、また、山口大学同窓会佐々木会長(常盤工業会会長)からもご祝辞をいただくとともに、他学部の同窓会からのご来賓の紹介もあり、特別会員である旧教官、元教官からも同窓会に対する励ましの言葉をいただきました。

最後に、鴻文会岡光新会長のあいさつで二時間間にわたる懇親会は大盛況のうちに閉会し、会員の多くの者が同窓会に出席してよかったという満足感とともに会場を後にしました。

(文理解第一五回卒・社会学)



懇親会



総会

総会公開記念講演要旨

消費者庁・消費者委員会発足が問いかけるもの

消費者庁行政推進会議委員

原 早苗

はじめに

環境庁以来、四〇年ぶりに新しい庁ができることになりました。九月に消費者庁・消費者委員会が発足します。審議会の審議のなかでは出てこない結論で、政治主導で決まりました。大きなうねりが起きています。諸外国では、消費者行政は競争政策、安全政策の観点から、かなり明確に意識され存在しています。今回の動きは、福田元総理のもと、昨年(二〇〇八年)六月に消費者行政推進会議でとりまとめた結果にもとづいています。座長は、元東京大学総長の佐々木毅先生、政治思想史がご専門です。

さて、私が学生だったのは、一九七〇年を前後してのころです。社会学を専攻しており、なかでも「社会意識論」に関心があり、卒論のテーマにもしました。大学四年では就職できず、そのとき、できたばかりの専攻科に進み、ここでも、また論文を書くことになりました。担当は、山本陽三教授でした。再び、論文を書くにあたり、助言をいただきました。当時、消費者問題が活発化していました。振り返りますと、一九六八年に消費者保護基本法が制定され、各自治体に消費生活センターが設置されていく時代でした。消費者運動では、カラーテレビ二重価格問題などが起こっていました。山本先生のご提案は、具体的な運動を取り上げたほうがおもしろいのではないかと、いっていました。実際、取り上げてみると、どんな深みにはまっっていくようなフィールドワークとしてのおもしろさがありました。同時に、仕事や社会との関わりの持ち方としても、個人として関心が

強くなっていきました。戦後の復興は過去の記憶になり、消費生活まつしぐらの時代背景もありました。

一、日本での「消費者問題」の捉え方

では、消費者問題とは何か？ですが、産業革命以降、私たちは工場などで働く人(労働者)になり、そこで得た賃金で、市場から商品やサービスを買う人(消費者)になりました。一九世紀は労働者の世紀、二〇世紀は消費者の世紀と言われる所以です。

まず、一九世紀の半ばに生協運動が登場してきます。安くて品質のいいものを購入しようとする共同購入の萌芽です。二〇世紀に入ると、アメリカなどで商品テスト(商品選択)が芽生え、商品テスト誌が刊行されます。日本でも戦後すぐに、花森安治さんが『暮しの手帖』を刊行します。同時期、一九四八年に婦人を中心とした消費者運動体として主婦連合会がスタートします。これには、GHQの後押しもありました。GHQは、財閥解体、独占禁止法などを持ち込みますが、健全な市場を育成するためには、消費者の力が欠かせないと考えていたのだと思います。(私は、大学でも非常勤講師として消費者問題を教えています。消費者問題というとマーケティングの対象か、あるいは、クレーマーの存在のように見られていることが残念でたまりません)

一九六八年、消費者保護基本法が制定され、消費者行政や政策の充実、企業においても消費者相談窓口の設置、消費者運動の場面でも男性の参加や草の根の運動が展開していきます。消

費者保護基本法は、消費者の「権利」意識に根ざしたのではなく、情報力、交渉力、資金などの面で弱者である消費者の「保護」に力点を置いたものです。日本の消費者問題の捉え方のひとつの特徴です。

消費者問題も、八〇年代に入ると南北問題の登場、九〇年代に入ると地球規模の環境問題が着目され、消費生活のあり方、足元そのものが問われるようになってきました。

二、私たちは何に困っていたのか？

消費者問題、運動の現場に長く携わってきました。私たちは何に困っていたのか？ですが、『月刊 消費者』(日本消費者協会 二〇〇八年二月号)にまとめていますので、そこから紹介します。

○情報が一元化されていない
二〇〇八年の年初めに発覚した中国製冷凍ぎょうざ中毒事件は、あとになって突き合わせるのと販売店や輸入元、保健所などさまざまな場所に情報が届けられていました。しかし、いずれの情報もその場どまりでした。

○判断が遅い

英会話教室NOVAの商法については、九〇年代後半から問題視されてきました。東京都の被害救済委員会でも取り上げた案件で、解約精算時に消費者に不利な計算方法で精算するので返戻金が少ないというものでした。このNOVA商法が大きな社会問題になったとき、同社は破たんしてしまい、多くの被害者を出しました。

パロマガス湯沸かし器による一酸化炭素中毒の被害も、二人もの死者を出して、ようやく原因究明に至り回収となりました。

○産業優先が見え隠れする

こんなにやく入りゼリーの問題は、発売当初から死亡事故が相次ぎました。当時、消費者団体では新製品の失敗だとして農林水産省に製造・販売の自粛を求めたのですが、中小事業者が活路を見いだしたころなので、それはできないとされました。

薬害エイズの事件も、産業界の都合が優先されましたね。

○省庁のはざまに落ちている

銀行に限られていた外国為替の扱いが規制緩和により自由化されました。いろいろな事業者が外国為替証拠金取引に参入し、お年寄りに外貨預金のようなものだとすすめ、多数の被害者を出しました。二〇〇三年のころのことです。

消費者団体では、規制の網をかけてほしいとしましたが、当時、所管する省庁が明確でなく、金融庁と経済産業省のはざまに落ちているような取引だと揶揄されたものです。(いまは、金融商品取引法のなかに位置づけ、金融庁所管としていきます。)

○大きな問題になかなか手が出せない

多重債務問題や有料老人ホームの問題などです。多重債務問題も、多重債務者が二〇〇万人を、自己破産の件数が二〇万件を超えるようになって腰をあげました。有料老人ホームの問題を解決しようとしても、所管がはっきりしない時期もありました。

シンドラーのエレベーターによる死亡事故も、このような事故が起きたとき、すぐに事故原因究明機関が立ち上がらないことなども指摘されています。

霞が関のなかにあつて、消費者問題は片隅に追いやられているのです。

三、急浮上した消費者庁構想

二一世紀に入り、自動車のリコール隠し、BSE問題、耐震偽装問題、偽装表示事件などが、次々に発覚していきます。



講演中の原早苗氏

二〇〇七年九月、福田総理が登場し、全施策

を消費者・生活者の目線で総点検することが指

示されます。年明け、中国産冷凍ぎょうど事件

が起これ、官邸に消費者行政推進会議が設置さ

れます。六月に、とりまとめを発表しますが、

ここで、

○明治時代以来の殖産興国、戦後の経済復興優

先の政策路線からの決別

○霞が関に立派な省庁ができただけでは、なん

の意味もない(地方消費者行政の充実)

としました。

このとりまとめを受けて、消費者庁設置関連

三法案を秋の臨時国会に提出しました。しかし、

審議は、年明けの通常国会に持ち越されました。

二〇〇九年三月、衆議院での審議がはじまり、

五月二十九日に参議院で全会一致で可決されまし

た。審議時間は一〇〇時間に及び、重要な課題

が附則や付帯決議に目白押しです。

各国とも、競争政策の観点、製品や食の安全

の観点から消費者行政の仕組みを確立していま

すが、今回の姿は、日本独特の特異な形です。

四、消費者庁・消費者委員会による新しい行

政の姿

国会審議を経るなかで、条文の改正が行われ、

仕組みも変わってきました。

(一) 消費者庁・消費者委員会が同格で設置さ

れる構図です

もともとの政府案では、消費者委員会は消

費者庁の中に存立する審議会でした。国会審

議のなかで、消費者庁の外に出て「自ら調査」

や、総理大臣、消費者庁、各省庁などに勧告、

建議ができる存在になりました。消費者庁は、

金融庁と同様に、内閣府の外局に置かれ、消

費者委員会は内閣府の外に設置されまし

た。

(二) 安全、取引、表示など消費者に基本的な

事項は、消費者庁で一括して取り組みます

(三) 情報の一元化(収集・分析・提供)が大き

な柱になります。すきま事案にも対応しま

す

です

消費者委員会の担う機能は、

・自ら調査

・諮問を受けて答申(従来の審議会機能)

・勧告や建議などの権限をもつ組織

これを、どう作り上げていくかが、この構

想を機能させるカギを握っています。

(五) 地方消費者行政の充実

消費者行政推進会議の場でも、国会審議の

場でも、かなりの時間を割いて検討されたの

が、地方消費者行政の充実です。地方消費者

行政は、消費者保護基本法が制定された翌年

の一九六九年、地方自治法にもとづき「自治

事務」とされました。その動きのなかで、消

費生活センターが設置され、条例などが制定

されてきました。しかし、国に根幹となる行

政がないため、どんどん弱体化していきまし

す。予算も、この一〇年で半減している有様で

した。

地方消費者行政の充実、地方分権の時代

にあつてどう考えるのかも悩ましいところで

です。

消費者相談窓口の設置などは、設置基準な

どのガイドラインを定めるのは国の責務と

思われます。しかし、地方消費者行政の充

実は、そこに住む人の手にかかっています。

高齢者見守りネットワークの試みもスター

トとしています。自分たちにとって暮らしやす

い場を作る、地方消費者行政は、その根底の

ひとつになります。地方分権の枠組みのなか

でこそ、生かす道があります。

(六) 消費者教育

消費者教育の取り組みの必要性は従前から

指摘されているながら、遅れています。いま学

校で行われている消費者教育は、消費者基本

法やクーリングオフ規定を覚えさせる程度の

知識教育にとどまっています。

消費者教育は、市場や生活の場面をおし

て市民として考える消費者づくりになりまし

せん。北欧では、その観点からの消費者市民

今回の動きは、省庁の縦割りにとらわれず

横断的に、消費者・生活者の側から問題を捉

えていく、まず、消費者・生活者の目線から

考えてみる、行政の仕組み方の大きな変革で

す。あわせて、公務員の意識改革も要求して

います。消費者庁・消費者委員会の構想は、

行政や政策の立案を変える試金石なのです。

注：消費者行政推進会議は八月末をもって幕

を閉じました。私の現職は、消費者委員会事

務局長になります。

(文理第二一回卒・文学専攻科)

鴻文会役員

平二一・八〜平二五・八

名誉会長

湯川 洋司(人文学部長)

会長

岡光 一浩(昭和四一年卒・ドイツ文学)

副会長

北川 健(昭和三五年卒・国史学)

宮藤 隆夫(昭和四二年卒・社会学)

顧問

和田 敏英(昭和二八年卒・英米文学)

大塚 博久(昭和三一年卒・中国哲学)

大野 光生(昭和三一年卒・中国哲学)

田中 晋(昭和四一年卒・英米文学)

添田建治郎(昭和四四年卒・国文学)

委員

赤梨 和則(昭和四二年卒・西洋哲学)

兼清 仁志(昭和五二年卒・中国哲学)

原口 公康(昭和六三年卒・日本思想史学)

浅川 均(昭和六〇年卒・国史学)

山本 達夫(昭和六〇年卒・西洋史学)

斎藤 禎(昭和六一年卒・東洋史学)

村岡 睦子(平成六年卒・社会心理学)

大谷 泰子(平成一三年卒・社会情報論)

正分 あゆみ(平成一六年卒・博物文化論)

青島 啓(平成一〇年卒・博物文化論)

磯部 佳宏(昭和六二年院修了)

岡屋 真理(平成一六年卒・日本語文化論)

高田 知恵(平成一三年卒・中国語文化論)

中村 匡宏(平成九年卒・英米語文化論)

池田 容子(平成九年卒・英米語文化論)

岡村 賢司(平成七年卒・ドイツ語学)

沖田 庄二(昭和五七年卒・フランス語学)

中村稚恵利(平成一三年卒・言語情報論)

村田 博(昭和四二年卒・社会学)

渡邊 早苗(昭和五九年卒・西洋史学)

学内委員

本田 義昭

根ヶ山 徹

(昭和六〇年卒・中国語学・中国文学)

磯部 佳宏(昭和六二年院修了)

村田 裕一(平成三年卒・考古学)

村岡 睦子(平成六年卒・社会心理学)

◎平成20年度事業報告

1. 第35回役員会 (5月24日)
2. 山口大学日中学術交流奨励会理事会及び総会 (7月14日)
3. 山口大学同窓会理事会 (4月24日, 7月31日)
4. 会報「鴻文」第28号発行 (3月)
5. その他

◎平成20年度決算

収入総額	2,279,840円
支出総額	2,246,179円
残高 (次年度繰越金)	33,661円

〈収入の部〉

科 目	当初予算額	決 算 額
繰 越 金	283,849	283,849
会 費 収 入	2,090,000	1,890,000
繰 入 金	200,000	0
賛 助 金	300,000	104,800
雑 収 入	0	1,191
合 計	2,873,849	2,279,840

〈支出の部〉

科 目	当初予算額	決 算 額
会 議 費	100,000	48,327
印 刷 費	250,000	171,150
郵 送 費	450,000	465,315
事 務 所 運 営 費	820,000	729,900
ホームページ維持費	140,000	121,414
事 務 費	25,000	28,772
山口大学同窓会分担金	150,000	150,525
奨 学 金	150,000	151,890
寄 付 金 費	100,000	100,000
人文学部30周年事業	300,000	0
国際フォーラム支援費	200,000	200,000
慶 弔 費	50,000	58,606
積 立 金	0	0
総 会 費	0	0
予 備 費	138,849	20,280
合 計	2,873,849	2,246,179

〈特別会計〉

科 目	19年度財産	20年度財産
東 洋 証 券	1,411,777	1,411,777
定 額 預 金	5,630,000	5,630,000
合 計	7,041,777	7,041,777

◎平成21年度事業計画

1. 第36回役員会 (4月25日), 第37回役員会 (6月28日)
2. 人文学部創立30周年事業 (6月: 街灯設置)
3. 山口大学同窓会理事会
4. 第8回総会 (8月12日) (開催日時未定)
5. 会報「鴻文」第29号発行 (12月)
6. その他

◎平成21年度予算

〈収入の部〉

科 目	予 算 額	摘 要
繰 越 金	33,661	
会 費 収 入	1,910,000	10,000円×191人 (21年度入学者)
繰 入 金	1,200,000	特別会計より繰入
賛 助 金	300,000	賛助金 (H.21年4/1~H.22年3/31)
雑 収 入	0	
合 計	3,443,661	

〈支出の部〉

科 目	予 算 額	摘 要
会 議 費	100,000	役員会、交通費、その他
印 刷 費	250,000	会報、封筒印刷
郵 送 費	470,000	会報郵送料他
事 務 所 運 営 費	950,000	家賃、人件費、事務所経費 会長・副会長行動費
ホームページ維持費	130,000	
事 務 費	25,000	
山口大学同窓会分担金	150,000	
奨 学 金	150,000	第33回役員会にて承認
寄 付 金 費	0	山口大学日中学術交流奨励会が平成20年度に解散
人文学部30周年事業	300,000	前年度の積み残し
国際フォーラム支援費	0	
慶 弔 費	50,000	各同窓会への祝い金等
積 立 金	0	特別会計へ繰入
総 会 費	750,000	
予 備 費	118,661	
合 計	3,443,661	

〈特別会計〉

科 目	21年度財産	摘 要
中 国 電 力 債	1,411,777	
定 額 預 金	4,430,000	120万円を一般会計に繰入
合 計	5,841,777	

平成21年4月25日、監査の結果過誤なく的確に経理されていることを確認します。

監 事 藤 井 英 樹
北 川 健

山口大学同窓会理事会報告

「割り切れ無さ」の円舞曲

— 全学同窓会と学部同窓会のあいだ —

副会長 北川 健



九月一七日(木)、岡光会長と北川の両名は、当理事会(第四回)に初めて出席した。理事は各学部からの代表。出席者は事務方を含めて全二〇名。用意された議題は、六件。

以下、北川の私見をもって報告する。

もはや「連合」にはあらず
山口大学同窓会は、大学の法人化を契機に設立への協議が進められてきていたが、従来先行の「連合」会則案から「連合」の二文字を削る形で会則を制定。昨年四月をもって設立、発足した。

今回の理事会は一口でいうと、その「連合」ハズシの事後処理会議とでもいう基調。

とはいえ、会則の上では《もはや連合ではない》としながらも、理事会内部には、そもそも《割り切れしていない》《判然としていない》という滞留部分があった。

山口大学同窓会とは何んだ
協議は、その《割り切れ無さ》を克服しようとしてか、

「《アノ山口大学同窓会というのは何だ!》という反問が学部会員から返ってくる。

山口大学同窓会についての周知徹底が伴わないと!」という、新規同窓会の「周知徹底」を

外向きにアクセルすることで吹っ切れるかの方向でスタートした。

そして、

「では、ダレが周知徹底させるのか」

「各学部云々」

という結句に届いた時には、会議時間一二〇分のうち四五分を経過していた。

往返する「割り切れ無さ」

しかし、これで「割り切れ無さ」が一掃できるわけのものではない。

その典型が、一号議案(農学部会提案。これは、第一条(組織規定)に八つの学部同窓会の名を一括復活させる、という《連合モード》)でも受け取られる一部改正提案。直前可決の一号議案の第四条一部改正とはまるで逆行する。これぞ、理事会内部の《割り切れ無さ》の一方の顕現であった。

だが、会議は《連合ハズシ》のレールの上。通る話ではない。二五分を経て一同はこれを《割り切り》、否決した。

見かねての学長からの発言

こうした長議の底流には、全学同窓会成立のアカツキには学部同窓会は「解消」するかも知れないという、「連合」案出発当初から伏在する「解消」観測もナイマゼになってのことであった。

見かねてのゆえであろう、丸本学長から発言があった。

「山口大学同窓会は、決してこれまでの学部同窓会を解消しようというものではありません。学部同窓会には学部同窓会として大いにどんどんやっていってほしい」と

として理事の間に残続している《連合↓統合↓学部会解消》説にストップ〓《割り切り》をかけた。

しかし、これで《割り切れ無さ》の全部が吹き払われはしない。

図体はいまだ「連合」なり

この《割り切れ無さ》の根源は奈辺にあるのか。

名称も会則も「連合」式の部分を撤廃したといっても、それまでのこと。何もが「全学」式

になったわけではない。

早い話が、

①理事選出の母体は各学部同窓会—第六条(役員選任規定)

②資金は各学部同窓会からの分担金—第一条(資金規定)としての構造と基盤の上にある。

ゆえに、佐々木会長自身、今年七月の大学関係誌上で「山口大学同窓会は、学部同窓会によって構成されています」と表明している。

つまり、《八者連合》ではなくとも、《八者構成》ではあるのである。

すると、問題はこの《八者構成》をなぜ八者「連合」とは表明しないのか、というところにある。

「連合」では不具合なわけ

私見からすると、八者(九者)「構成」体を「連合」と称しては、山口大学同窓会としては、みずからの個人会員を直接持ち合わせてはいないという体制(〓団体職員組織〓連合組織体)のほどが、モロに露呈するからである。

そこをカバーし、「連合」(〓団体組織)ではなく、卒業生等個々に対応する全個人会員組織であるかのように被装、擬態したものが、とりもなおさず改正会則第一条が目指す新体制にほかならない。《連合ハズシ》というより、《連合カクシ》である。

だから、その会員に個々としての直接加入なり処遇を用意、保障しているわけではない。あくまで学部同窓会というワク組での、それを介しての団体一括加入の間接会員なのである。

擬態としての個人会員組織

だものだから、とりわけ入会希望者の側からすると、分かりにくい。第一条では広く門戸が開かれている個人会員組織のように見えながら、実は第六条、第一六条からすれば門戸と所属は学部同窓会にあるとする、つまりは団体職員組織となっているのである。

そこに、新会則体制の《判然としない》《割り切れ無さ》の核心、正体がある。

しかも、そうした関係なり位置づけを、「会員・組織」規定である第一条からして掲げても

いない。

面相は《全館一舎》のテイをとりながら、図体は《八館八舎》であるという、この擬態と演出こそ、目下の山口大学同窓会の会則であり、架設であり、正体なのである。

いわばトリック・ハウスであり、折紙細工の《だまし舟》の帆先を摘ませるかの仕掛けとなっている。

新会則体制の《判然としない》《割り切れ無さ》の根源は、このみずからの《名実の乖離》の構造とその架設にある。

だから、これを「周知徹底」するとは、この《擬態との乖離》《割り切れ無さ》のほどを自覚、開示することなくしてはありえない。

大学側からの積極的な意向
大学側は、この新規第一条の《擬態》に拠点を置いている、と見える。

「各学部同窓会の会費の徴収を本部事務局が一括行ってもよい」

「生涯メール方式を大学側で導入すれば、会員への生涯通信は可能だ」

「大学による名簿管理だとセキュリティは高い」

という意向まで示していることからすると、会員個々との《境界面》《窓口》にスタンスを置く向きにある。

だから、「各学部は各学部でどんどんやってください」という学長発言は、裏を返せば《大学同窓会のはうは学部同窓会とは別物として、大学本意に大いにやらせてほしい》という新たな《割り切り》のシグナルだと、私には聞き取れた。

三つのエネルギーの綱引き

私の見るところ、山口大学同窓会は、これまでのところ三つのエネルギーの上に架設されてきている。

①全学同窓会という形で全卒業生等を事業

《対象》とした、という大学側のエネルギー。②大学事業には或る程度《協力》《協調》は

しなくてはなるまい、という各学部同窓会のエネルギー。③《統合〓解消》はされたくない、自己《存

立」は堅持する、という各学部同窓会のエネルギー。今回の学長発言で《解消》説は否定されたとしても、学部同窓会である以上③エネルギーは存続する。

すると、この①エネルギーと②③エネルギーが組み合って、《割り切れ無さ》合作のプロデュースなりブレイキ、綱引きをしていくことになる。

そのトライアングルが現実の全学同窓会という《割り切れ無さ》の束にはかならない。

「連合」の名は消えれども

理事会は八つの学部同窓会代表による《八者》協議体。

とはいえ、内実は大学一者と学部同窓会八者との《一者×八者》協議という構図とエネルギーで進行しているはず。

今回協議のラスト議題は、「各学部同窓会の会費額にはバラツキがある」として、これを「統一額とし、後援会費と併せて大学側が徴収するのはどうか」という、いかにも《統合》めいた、それも佐々木会長自身からの提案議題であった。

してみると、「連合」の名が消えたからといって、《連合→統合》の伏線が立ち消えたわけではない。むしろ「連合」の名が消えただけに、《統合》は折りあるごとにいきなり顔を出してくることにかなりそうである。

この会費云々案については、「従来どおりでよし」として協議一五分で否決した。このことは、一方からすれば《割り切り》であり、他方には《割り切れ無さ》として残る。なお、ちなみに会費は一万円(人文学部)から三万五千円(医学部)までの階差にある。

新しい酒には新しい革袋を

いずれにしても、新組織である山口大学同窓会が、これからの新しい交流と貢献へのイニシアティブとシステム構築を担い、その大学運営への《供用》をプロデュースしていくとき、大学同窓会は学部同窓会を大きく越えていくものがある。

でなくては、全学同窓会を設立する価値はない。既存の学部同窓会の《揃い踏み》だけでは済まないはずである。

それにつけても、《新しい酒は新しい革袋にこそ盛り！》という思いも、私には強い。

全学同窓会は、学部同窓会の単なる延長線上にあるものではない。

また、学部同窓会は、そもそも全学同窓会とは別物である。ましてその主体たるものではない。

そう《割り切る》ことがあってこそ、《割り切れ無さ》もまたあるのである。

(文理第八回卒・国史学)



会議風景

任を終えて

前会長 大野光生

平成二十二年(二〇〇九)八月二日、鴻理会と合同の鴻文会総会開催を期に二期八年間つとめた会長の任を終え、新会長岡岡一浩氏へバトンタッチいたしました。

私の前の会長でした有馬氏の訃報に接したのが、平成一九年二月二日のことでした。前々会長だった大塚博久氏からの電話でした。平成一九年と言えば今から二年前のことです。会長の任期は四年間なので、有馬氏は現役の会長職にありながら、突然の病に倒れ、副会長であった私が、急遽、会長として引き継ぐことになりました。有馬氏の会長就任は平成十年でした。就任されて間もなく倒れ、九年間闘病生活をされました。私が氏の残余任期を引き継ぎましたので、二期八年とはいえず、実際には十年間任に当たったこととなります。就任して間もなく倒れた有馬氏のことを思いますに、当時は国立大学が独立法人化されたばかりの頃でした。広中校長の発案で、母校存続の危機に対応するため、各学部の同窓会組織が一体となる山口大学同窓会連合会なるものが生まれたのでした。同窓会が仲良しクラブ的存在であったのが、いわば経済的支援団体の役割を担うことになったのです。しかも、その連合会の初代会長に推されたのが鴻文会々長の有馬氏でした。氏は、鴻文会とは他の同窓会と比べ、伝統の基盤もなく、弱小民族だと意識しつつも、連合会の会長としての任に就かれたのでした。氏は私と同期の三一年卒で、その彼が、重責を担ったが故に、死期を早めたのではないかと想像するにつけ、無念の思いが今更ながら湧いてきます。その後を引き継いだ私でした。その後、私の任期の終わる五か月前、二〇〇九年三月に、同窓会連合会の呼称が山口大学同窓会となるに及び、

その初代の会長を決定するに際して、随分紆余曲折したものでした。しかし、すでに連合会当時、有馬氏が会長の役目を担ってくれたために、その連合会が消滅し、一本化した山口大学同窓会となっても有馬氏の免疫も消え、代わって常盤工業会の会長が初代の会長を引き受けられたのでした。

有馬氏の後を継いで、私が鴻文会々長となつた間、独立法人化された大学の始まりからずっと、揺れに揺れ続けた一〇年間だったような気がいたします。広中校長時代から加藤学長、そして丸本学長時代へと三代にわたり、私たちは平成の激動期を過ごしたのでした。奇しくも、私が任を終えた八月、国の政権も山大学長も替わりしました。新しく生まれた政権は、五五年続いた前政権のまつりごとをコンクリートにたとえ、これからは友愛を職とし、ルネッサンスを思わせる発想に大きく変革いたしました。国民の意志が選挙という手段で無血維新の道を全うしたので、新政権最初の国会で新首相はそう演説していました。「維新」が特に私には印象的でした。すでに会長の任を終えた私は、その演説を聞きながら、大学も法人から再び国立大学という本来の姿に戻るべく、同時に同窓会も母校の健やかなる姿を反映して仲良しクラブ復活へと変化するのを切望するものです。

論語には、「士たるものは広い包容力と強い意志をもたなくてはならぬ」とあり、「任重而道遠、仁以為己任、不亦重乎、死而後已、不亦遠乎」(任重くして道遠し、任以て己が任と為す、亦重からずや、死して後に已む、亦遠からずや)という一節があり、今更ながら思い出されます。はたして、私の担った「任」は論語の「任」とは程遠いものだったように思われ、「死而後已」がずしりと胸にせまってくるこの頃です。

(文理第四回卒・中国哲学)



人文学部教育職員紹介

学部長(併)

教授 湯川 洋司

○ 人文社会学科

哲学・思想コース

教授 高木 智見

教授 豊澤 靖一

教授 脇 條 弘

教授 Alan Djumali

准教授 柏木 寧子

准教授 古荘 真敬

准教授 藤川 哲均

講師 田中 均

歴史学コース

教授 尼川 創二

教授 中村 友博

教授 田中 誠二

教授 額 厚

教授 橋本 則

教授 馬 義彪

教授 滝野 正二郎

准教授 藤永 康政

准教授 真木 隆行

准教授 村田 裕一

社会学コース

教授 小谷 典子

教授 辻 正二

教授 湯川 洋司

教授 坪郷 英彦

教授 横田 尚俊

准教授 高橋 征仁

准教授 山本 真弓

○ 言語文化学科

日本語・日本文学コース

教授 林 伸一

教授 平野 芳信

准教授 磯部 佳宏

准教授 森野 正弘

准教授 尾崎 千佳

中国語学・中国文学コース

教授 阿部 泰記

教授 富平 美波

教授 根ヶ山 徹

准教授 更科 慎一

アジア言語コース

教授 平野 尊識

准教授 和田 学

英語学・英米文学コース

教授 岩部 浩三

教授 太田 聡

教授 宮原 一成

准教授 池園 宏

准教授 赤羽 仁志

講師 メドロック麻弥

ヨーロッパ言語・文学コース

教授 井上 三朗

教授 本田 義昭

教授 Hintereder - Ende Franz

准教授 下崎 正利

准教授 武本 雅嗣

准教授 坂本 貴志

言語情報学コース

准教授 Phillips John David

准教授 乾 秀行

ご退任教員 挨拶

退職するにあたって

尼川 創二



あと数か月で、三〇数年にも及ぶ山口大学での正式の教員職ともお別れです。山口に赴任できたのは、もっけの幸いでした。山口は、私の父方の先祖の土地であり、私が生まれた場所である鳥根原(のずつと田舎と、私が小学校三年から高校三年までを過ごした福岡市との中間に位置する、ぐっと落ち着いた、渋い町でした。

京都大学の大学院博士課程で、山口大学の文学部(当時)に採用になり、大学院を中退して山口に参りました。以後、山口大学で西洋史一筋に教えてきました。三〇年以上たつて山口大学の周辺環境は大きく変わりました。山大通りも美しく整備され、スーパーアルク、郵便局、マリノ、多くの店ができ、以前と比べると大違いますが、研究室の窓から見える山や夕日の美しさは少しも変わっていません。昔の学生は、蛮カラというか、はじめていました。今は良きにつけ悪しきにつけ紳士的になっているように思います。

個人的なことでは五年前にかかった脳梗塞は最大の出来事でした。ある日突然自分の体が思うように動きません。数か月寝込んでいました。半年かかって、必死で歩行訓練した結果、起き上がることができ、杖(先が四つに分かれているので、倒れない)を引きひき、数十メートル休まず歩けるようになりました。あと少し遅かったなら、大学へは戻れなかったと思います。後遺症として言葉と右半身の不自由さがのこりました。実際のところ、このまま永久に復職できずに身体障害者のまま終わってしまうのか、それともう一度教壇に立つことができる

のか、悶々たる毎日でした。医者も、機器を利用する方法はあるが、大変だろうというような顔をしていました。この時病院にお見舞いに来てくださり、励ましの言葉をくださった先生方や大学関係者の方には心から感謝しております。大学に復職して一番有難く思っているのが、パソコンによる講義内容の揭示です。これを用いれば、記述してある文は、お粗末になってしまった声を無理やり出して説明することも少なくて済みますし、板書に半分麻痺した右手がわりの左手で下手な字を書かなくても現れます。何せ打つと文字が書けますから、細かい手の動きは関係ありません。他にも綺麗な絵のコピーを見ることができません。受講生へのプリントは値段の関係で全面を白黒にしていますが、スクリーンに映し出す絵は総天然色で、しかも大きさは自由自在です。このような器械が私の教員の時代に間であってくれたとは、感激です。山口大学人文学部での最後の論文「ステンカ・ラーヂンの反乱」『山口大学人文学会志』六〇号もパソコンで作成したいと思っています。ステンカ・ラーヂンは一七世紀のロシアの勇猛な、コサックの首領です。専門をずっと離れたことになりすけれど、ラーヂンは自分自身面白かったところでも、本のたりないところは、大学図書館を通じて、他大学から借りた本に頼りました。これも昔は考えられなかったことで、パソコンの発達によるものです。私の論文は、あまり期待せずに見てやってください。最後に、授業の準備を手伝ってくれた学生たち、雨の日傘を差しかけてくれた学生、荷物を持ちましようとして声をかけてくれた人、図書館の方々、いろいろなところでのちよつとした気遣い、多くの山大的優しさに接しました。本当に有難うございました。もうひとつ付け加えますと私がパソコンにこのように熟達(?) することができるようになったのは、妻のおかげです。妻は少しパソコンの資格をもっており、手助けをしてくれます。他に、出席状況の把握、自家用車の運転(これは本当に有難いです)も世話になっていきます。妻なしでは十分な仕事ができなかつたでしょう。(歴史学コース 教授)

ご退任教員 挨拶

初めての女性教員

小谷 典子



私が山口大学に着任したのは、昭和五四年一〇月一六日のことである。変則的な時期であったのは、前任者の山本陽三先生が五二歳の若さで急逝されたからである。

その当時、社会学という学問は急成長しており、同窓の男性たちは若くしてほとんど就職していったが、女性である私は、一四年半の間、学生、助手、大学院生、助手と、身分を転々としながら九州大学文学部に所属し続けた。研究室では良い先生方に恵まれ、多くのことを学びとることができ、今にして思えば、学問的にはよい充電期間であった。

山口大学では最初から助教として採用されたこともあったが、学部始まって以来の女性教員ということで、当時の学部長渡辺眞治先生（西洋史）は、「何か言う人がいるかもしれないが、しばらくは知らん顔しておいてください」とおっしゃった。

母校の先生も、私を送り出すときに、「一年間は会議でしゃべらないで、周囲の様子を十分に観察し、自分の置かれている状況が分かるようになってから発言すること」と助言してくださった。それを忠実に守り、一年以上、諸先生方の発言内容や言外の行動などをじっくりと観察し続けた。口に出しては言わなかったが、学部の人間模様は手に取るように分かるようになっていった。

中には、「女はいらんことしなくてよい」とか「女を探るなんて、よほど人がいなかったのだろ」と直接言われる先生もおられ、女性教員

はよほど目障りであったようである。肝心の学生たちも「何でぼくたちの先生は女なの」と、ぼやく始末である。

女性でも男性以上のことができると、昭和五七年に初めて個人で科学研究費を取得した際に、福岡県の筑豊に炭鉱閉山後も残存している炭住の居住者に対して、面接調査をするために学生たちを連れて行った。筑豊と言えば、五木寛之の『青春の門』の世界で、男性でもなかなか入りにくい場所である。

その後も、社会学調査実習の授業で福岡県の過疎山村矢部村には三年間通い続け、村のマスタープランを作るお手伝いをした。また、北九州市、宇部市、防府市など各地の研究フィールドに、学生たちを泊まりがけで連れ出した。研究費が工面できない時には、宿泊を伴う調査に学生は連れて行けず、「学生たちを公平に」という私の教育上の信念からは、彼らには今でも申し訳なかったような気がする。

これらの研究成果を、三浦典子『流動型社会の研究』（恒星社厚生閣、一九九一年）として出版し、九州大学から文学博士の学位をいただいた。三浦典子は旧姓である。学位を取得する際に、「三浦典子が小谷典子であるという証明書を出すように」と事務から言われた。さんざん思案して、婚姻の事実が記載されている戸籍謄本を提出した。戸籍謄本を提出して学位を取得したのは私くらいであろう。

研究事務室に長年勤務しておられた川崎和子さんは、「先生、頑張ったね」と大変喜んでくださり、「商売物で悪いけど」と、お祝いに布団をくださった。

平成一三年に、人文学部と経済学部を基礎に、山口大学に人文学部の博士課程「東アジア研究科」が設立された。当初は、価値観の異なる先生方の多い経済学部との争いばかりで、人文学部からはその闘いの楯に祭り上げられ、ずいぶん不愉快な日々を費やした。平成一七年からの四年間は、東アジア研究科長を務めたが、山口大学では初めての女性の部長であった。

また、大学の広報担当責任者として、大学法人化に向けて、ピーコックグリーンと若草色を

配した山口大学のシンボルマークやロゴを制定した。ありがたいことに、このマークは今では正門前にモニュメントとなっており、私が大学を去っても、私の仕事は目に見える形で存在し続けることになる。

三〇年間に送り出した学生や修了生は、日本人の学生と東アジアからの留学生も含めて、正確に数えたことはないが、千人以上になるであろうか。

この間、母校をはじめ、ずいぶんいろいろな大学からお誘いがあった。最も印象的であったのは、経済史学者として著名な山之内靖先生が、私の『流動型社会の研究』を読まれたらしく、手紙や電話で「とにかく一度だけお目にかかりたい」と。

学会の会議で上京した折に、上野の国立西洋美術館でお会いすることになり、出かけるのところで私の本を持って立っておられた。歴史学者はこのような本の読み方をするのかということを思い知るほど、ずいぶん丁寧に読んでくださった。博士論文の口頭試問よりも厳しい質問が矢継ぎ早に飛んできた。

友人などは、「なぜ断るの。もったいない」と言っていたが、女性教員を採用するという英断を下された山口大学人文学部に対しては、最後まで勤務し続けるのが恩返しであろうと、すべてお断りしてきた。

高校を卒業する時クラスメイトが、「女性でも男性と同じようにできることを証明してください」とエールを送ってくれたが、果たして合格点がいただけるかどうか、いつの日かクラスメイトに尋ねてみたいと思う。

(社会学コース 教授)



小谷典子先生最終講義

日時 平成二二年三月六日 一五時から
場所 山口大学 大学会館ホール
主催 山口大学人文学部 社会学コース
題目 「流動型社会から ネットワーク型社会へ」
問い合わせ先 E-mail: n.yamaguchi-u.ac.jp (社会学コース 横田尚俊)

学 生 数

人文学部 平成21年11月1日現在

Table with 4 columns: Year, Humanities and Social Sciences, Language and Culture, Total. Rows for years 1-4.

人文科学研究科

Table with 4 columns: Year, Regional Culture, Language and Culture, Total. Rows for years 1-2.

平成二一年度人文学部生涯学習事業

本年度の生涯学習部会の活動は、つぎの通りです。

やまぐちサタデー・カレッジ (公開講座)

平成一三年度に始まり、今年度は九年目を迎えます。異文化交流コース・やまぐち学コース・日本文化コース・現代文化コース・外国語学習コースの五コースがあります。

今年度は、前期に異文化交流コースで阿部泰記教授の「中国古典文学」(全四回)を開催しました。後期は外国語学習コースで本田義昭教授の「ドイツ語でニュースを読む」(全六回)を開催中です。そろそろ来年度の計画を立てる時期です。人文学部のホーム・ページにのせる予定です。

幽前講義

県内外の高校などから、学問的な内容の講義が聴きたいとの要望に応えるために、エクステンション・センターと連携して展開しているもので、今年も人文学部教員に数校から依頼があり、出講しております。

人文学部公開講演

県内主要都市に向いて二名の人文学部教員が講演を行う事業で、今年度で第二二回を迎えます。今年度は十一月二十一日(土曜)に防府市のアスピラートで防府市教育委員会の後援のもと、「ご当地出身のお二人に「地域社会の個性とまちづくり」という共通テーマでお話をさせていただきます。坪郷英彦教授「住まいの民俗―大道を中心にして―」と小谷典子教授「企業×セナとまちづくり」が予定されています。

(歴史学コース教授・田中誠二)

恩師健在

いろいろと、考えています

関一雄



この五月に出版しました『平安物語の動画的表現と役柄語』(笠間書院刊へ一八九〇円税込)という奇妙な書名の小著について書かせていただきます。

平成二〇年度学部卒業生・大学院修了生進路状況

	学部卒業	大学院修了
農業	4	
建設業	5	
製造業	18	
情報通信業	11	1
運輸業	5	
卸売・小売業	13	1
金融・保険業	15	
不動産業	1	
飲食店・宿泊業	3	
医療・福祉	4	
教育・学習支援	17	
複合サービス事業	9	
サービス業	12	
公務	19	2
上記以外	1	
進学	7	2

産業分類別に集計したものです。

書名の中の「平安物語」は、「平安時代物語」「王朝物語」としても差し支えないのですが、前者は少し長くなり、後者は小著の始めにとりあげた『竹取物語』にはどうもそぐわない呼び名のように私には思え、国文学者の著書にも使われることのあるものになりました。

いまは昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづの事に使ひけり。名をば、さかきのみやつことなむいひける。

で、始まります。最初の一節で、平安時代の読者(又は聴者)は直ぐさま「竹取を生業とする翁」を思い描いたでしょう。語りという言葉によつて登場人物が描き出され、読者はそれを受け止め、自己の中で映像化することに何の抵抗もなかったはず。昔テレビも無く、映画も貧乏でチケットを買って見ることのできなかった私は、町の図書館で漱石や芥川の小説を借り、そこに登場してくる人物の顔立ちや服装とその仕事を頭に描きながら、楽しんで読んだもので

すが、平安時代の人々の物語の楽しみ方は、そのようなものであったと考えます。『竹取物語』の続く一節「野山にまじりて」では、その翁が竹藪のなかに分け行つて、農家が求めている籠や箆を作るのに手頃な竹を探し回る仕事を思い描くのです。次の一節に「さかきのみやつこ」という実名まで出したのは、この物語は架空の話ではなく、実際にあったことなのですよ、と読者を物語世界に引き入れる見事な仕掛けでもあるのです。こうして、物語に引き入れられた読者は、次の語りに聴き入ります。

その竹の中に、もと光る竹なむひと筋ありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。

根元が光っている竹を見つけた翁が、そこへ近寄っていく場面で「あやしがりて」とありますが、このところを、殆どの注釈書が「不思議二思ッテ」と現代語訳しているのです。少し考えていただければ分かりますが、先にも書きましたように、物語の語りは登場人物の仕事を描き出しているのです。へ思ッというような心の中を説明したり解説したりしているわけではありません。へ首ヲ傾ゲルという仕草の表現ですから、「動画的表現」と言つてよいと考えました。

次に「役柄語」という用語も私の造語です。私が大学生・大学院生だった頃は、もとの漢籍や仏典に平安時代頃の当時の学者や僧侶が読解のために書き込んだ訓点の研究が盛んでした。この訓点資料を通して分かってくる平安時代の言葉の研究が重視され、『竹取物語』や『源氏物語』は仮名で書かれて、後世の転写本しか残っていないことから、仮名資料は二級のものとして軽視されがちでした。訓点の研究の成果として得られた言葉は「訓点語」「漢文訓読語」と呼ばれ、特に『源氏物語』に使われない言葉は「漢文訓読特有語」と呼ばれ、『源氏物語』に代表される仮名文学の用語を「和文語」と呼ばれるようになりまし。ところが、その「漢文訓読特有語」が、『竹取物語』の中には少なからず用いられているのです。それについての通説は簡単に



大学風景

言えば、古く漢文体の『竹取物語』があった、それをもとに翻訳または翻案したためであるとするのです。しかし看過できないのは、その「漢文訓読特有語」は、『竹取物語』全体に使われているのではなく、先の翁や貴族に使える家来、船の楫、貴族の調度等を作る細工師などの登場人物の会話（セリフ）に集中して用いられているのです。この事実は、いわゆる「漢文訓読語」が当時の日常用語であったものを、物語作者が、登場人物すなわち物語のなかの役者のうちで身分の低い者の個性（キャラクター）を鮮明にするために用いさせたと考えられると思うのです。一方、身分の高い登場人物にはそのような言葉を選び、類義の語を使わせるという、高度な用語選択をしていたと考えます。そこで、そのような役者のセリフのうちで翁らのそれを「役柄語」と呼ぶことにしました。この考え方は、『竹取物語』自体を言葉（語りとセリフ）で作られたお芝居に見立てたものでもあります。

『竹取物語』とは同じ時期に書かれたとされる『うつほ物語』は、もう少し複雑ですが、与えられた字数をオーバーしてしまっていますので、これで終えることにします。

(二〇〇九年一月二〇日 記)

(平成一〇年)退官・国語学

その後

山本和之



振り返れば退職してもう一〇年、私の過ぎた山大が遠い夢の中のような存在になってしまった。今は無くなった後河原の校舎、若い世代には想像もつかないだろう。滅多に山大（平川）に行くことはないが、行けば懐かしさがこみあげる。様子は変わっても、あの時のあの場面が昔のままに蘇る。あの学生、今頃どうしているだろう。

山大文理学部、教養部、文理学部・人文学部に三七年、県内の私大に四年、放送大学に二年、またもとの私大に戻って山口線の矢原駅からJRで通っている。通勤に時間はかかるが、車窓から季節とともに移り変わる沿線の風景を眺めたり、やり損ねた予習をしたり、乗り合わせた学生と話したり、眠いときは寝ることもできる。高校生のおしゃべりから若者言葉や言葉の変化を拾うこともできて、私にはとても便利な時間である。幡生駅から徒歩二五分、ちょうどいいウォーキングの距離だ。以前は新山口からの快速電車は湯田温泉までは通過していたが、今は手前の矢原、大歳にもとまってくれる。快速電車に乗り合わせた時はなんだか得したような気分になる。

山大（平川）にいた時は、時間があれば放課後テニスをして帰るのが日課だった。ある日、膝がギクツクといって水がたまり始めた。整形外科に立ちこちかかったあけく、水中ウォーキングにたどりついた。でも折角プールに来ているのに、歩いているだけでは面白くないと泳ぐ方に転向した。それ以来やみつきとなり、今では週三〜四回家内と一緒にクロールで一、五〇〇

メートル泳いで帰ってくるのが習慣になってしまった。知人から、三途の川を夫婦一緒に泳いで渡るリズムが保てるし、丁度いい気晴らしにもなるのだ。テニスで膝を壊したときは、歩くことさえ辛い思いをしたが、そのお陰で今の泳ぐ楽しみを手に入れることができた。神様はうまく埋め合わせをしてくださった。

私は小学校時代農家で育った。戦時・戦後の食料難の時代、山村の農家で本当に助かった。今受け継いでいる田畑や果樹の世話には家内が主役であるが、勉強に飽いたときなど、息抜きに野良仕事をするようにしている。あまり広くないところにいろいろな野菜を植えるものだから、それらが自然交配して、スーパーでは絶対手に入らない、野良生えの新奇な野菜が生まれてくる。私にはこの雑種（新種）の方がずっと面白い。これは何が混ざったのだろう、食感、味はどんなだろう、いや、もしかしてただの草かも。思いがけないものに出会えると嬉しくなる。

このごろ教室で出会う学生にも思いがけない若者がたくさんいる。苦労はするが、面白い。授業に行くたびに新発見がある。戸惑いもあるが、いい勉強になる。それにしても、昔山大で使っていたテキストを見ると、こんな難しいものをよく使えたものだ、感心させられる。今は学生の英語力（のあり方）も英語への接近の仕方もさまざまで、こちらもそれなりに気配りしているつもりだが、学生の身になってみれば、こんなはずではなかったという思いがしているかもしれない。

自分の研究や授業の準備、大学の用務などは、長い間やってきたことの延長である。しかしそれに充てる時間や内容は時代とともに随分と変わってしまった。みんなと一緒に変わってきたつもりだが、いつまで一緒に走れるだろうか。何事にも潮時があるとするれば、私は潮時を失っているかもしれない。よく分からないけど、もう少しだけこのまま走ってみよう。その時が来れば神様がきっと知らせてくださるだろう。そう願っている。

(平成一一年)退官・英語学

同窓生 寄稿

会者定離

山本孝夫

漱石は明治二七（一八九四）年二月、東京帝國大学大学院在籍中、友人に誘われて弓道の稽古を始めました。しかも朝夕それぞれ百射行っているから鋭意専念したといえましょう。それより前、明治二二（一八八九）年頃から、彼は正岡子規の影響を受けて俳句を作り始めています。

四九年の生涯において句作に耽ったのは大学院時代と、卒業後、松山と熊本において教鞭を執っていた時が主で、その後イギリスへ留学し、帰国した後はそれほど句数も多くありません。私は漱石の弓矢に関する句を拾ってみました。全句作二千五百を超える中で僅に一五句を見つけただけです。その中に句意が誰にでも容易に解せられるものもありますが、そうでないものもあります。たとえば次の三句などはそれなりに容易に解釈できるのだと思います。

- 大弓やひらりひらりと梅の花
 - 矢響の只聞こゆなり梅の花
 - 弦音にほたりと落ちる椿かな
- これに対して、次の句は難しいのではないのでしょうか。

月に射んのは梅檀（せんだん）弦走（つるばし）り
時（ほと）鳥（ときぎす）弓杖（ゆんづえ）ついで源三位

漱石の蔵書の中に『平家物語』や『保元物語』があります。これらの古典に目を通してみたところ、上記の二句について私なりに理解することが出来ました。たとえば前者について考えてみますと、保元の乱で崇徳上皇側について為朝は、後白河天皇側に加担した兄義朝に弓を引かんとしますが、そこは血を分けた兄弟。天下無双の腕前を誇る為朝としては兄を射殺するに忍びず、一の矢を放つて兄の胃の星を射削るにとどめます。そのとき為朝は兄に向って次のように叫びます。

「存する旨ありて斯くは仕り候へども。誠に御許しを蒙らば。二の矢を仕らん。真向内(うち)胃(かぶこ)(注：顔面の額の部分)は恐れも候ふ。障子の板か。梅檀弦走りか胸板の真中か。(中略)矢壺を慥(たしか)に承って仕らん。」

ここに出てきます「障子の板」「梅檀(せんだん)」「弦走(つるばしり)」「は鏡(よるい)に付属したもので、射かけられた矢を防ぐ具の名称です。為朝は兄の望み次第何処でも矢壺(注：的のこと)と指摘したところに狙いを定めると言ったのです。漱石はこの為朝の事蹟を踏まえて、この句を詠じたという事が分かりました。

二番目の句については『平家物語巻第四』の「鶴(ぬえ)」の記述を踏まえてのものと思われる。簡単に内容を紹介しますと、歌人として有名な源頼政(源三位入道)が謀反を起こす前、宮中に仕えていたとき、紫宸殿に「あやしき物の姿」があり、天皇は毎夜悩まれた。そこで頼政が「南無八幡大菩薩」と心のうちに祈念して射ると、てごたえがあった。あやしき物は世にも珍しい鶴であった。天皇は感じ入られて、左大臣藤原頼長を通して、獅子王という御剣を頼政に賜わった。この箇所は原文では次のようになっています。

「比(ころ)は卯月十日あまりの事なれば、雲井に郭公(ほととぎす)、二声三声音づれてぞ通りける。其時左大臣殿、ほととぎす名をも雲井にあぐるかな

とおほせられかけたりければ、頼政右の膝をつき、左の袖ひろげ、月をすこしそばめにかけてつ、弓はり月のいるにまかせて」と仕り御剣を頂戴した。

「弓矢をとつてならびなきのみならず、歌道もすぐれたりけり」と天皇も家臣も感動した。左大臣の歌は、時鳥が空高く鳴き声を立てているが、それと同様にそなたも宮中に武名をあげたことよ、との意味です。これに対して頼政は、弓を射るに任せて、偶然にしとめただけです、と謙虚に応えました。ここに武骨一辺の荒武者ではなく、詩歌の道の心得もある頼政の武人としての矜持ある姿を見てとることが出来ます。漱石はこの情景に共感して先の句を詠んだのでしよう。

思わず弓の事を長々と書きましたが、それは山口大学時代の恩師、池本喬(たかし)先生に一冊の書物を紹介していただいた奇縁を、この年になって感じるようになったからです。

私は昭和二六(一九五一年)年に山口大学文学部に入りました。二学年になったとき英米文学科を選びました。主任の岡崎先生の他、池本、小西、田中、上田、吉武、緒方、川瀬といった先生方がおられました。しかし今は昔、もう半世紀以上も前に教えを受けた先生方はみな鬼籍に入っておられます。まさに「会者定離」の感があります。

英米文学科の諸先生方の中でも、特別有難い御縁を頂いたのは、池本先生でした。志望学科が決まったとき、一人の先輩と先生のお宅へはじめに参りました。爾来在学中はもとより、卒業後もずっと、事ある毎に御自宅にお伺いし、又先生が山口大学を退官されて京都府長岡京市に移られた後も、御自宅に泊めていただいた事があります。

先生は、「山本君、家内が出て挨拶するのは君だけだよ。」と言われたことがあります。実は先生の奥様は心の病に罹っておられ、決して人前には出られなかったのです。そのため先生は食

料の買い出しなど皆自分でしておられました。先生のお悩みは尋常ではなかったと思います。また先生はこんなことも言われました。「僕はね、家内があのような病気だから、神に祈り救いを求めた。しかし自分の身が持たなかった。禪を学ぶことによって、気持ち落ち着いたと言えらる。」

先生は禪関係の文献や、禅詩人の高橋新吉の詩を英語に翻訳して、海外の有名な出版社から上梓されました。先生からドイツの哲学者オイゲン・ヘリゲルの『弓と禪』という本を紹介していただいたのは、そのような折りだったと記憶しています。

『弓と禪』を読んではみたのですが、なかなか難しい内容の本だと思えました。再読したのはずっとあとのことです。平成一〇年に、私は生まれ故郷の萩市から山口市に居を移しました。その翌年勤めから完全に解放されました。弓道教室に入門しました。そのおりに『弓と禪』を取り出してみました。そのおりに初めて読んだときよりは興味を持って読むことが出来ました。弓の稽古をしたといっても、しょせん畳の上の水練で、この本の真髄を味読するには勿論至っておりません。

しかし指導して下さった先生方のお陰で、弓道という我が国古来の素晴らしい伝統武芸を垣間見ることが出来たのは事実です。また弓道に関する文献や文章にも関心を向けるようになりました。そして漱石と弓道との関係を知ることが出来ました。(漱石と弓)『図書』第六三六号二〇〇二年四月所収、参照)。

池本先生は、昭和五五年三月二日に七三歳で亡くなりました。二日後に葬儀が京都府の八幡市の寺院で営まれました。友人代表として小西邦太郎先生が弔辞を捧げられました。そのおりに、僧越とは思いましたが、私もお別れの言葉を述べさせていただきました。光陰矢の如し、その時からもうすぐ三〇年になります。私は今や先生の亡くなられた時のお年を越えてしまいました。

弓道では「射法八節」といって、的に向かって射終わるまでの動作を八つの段階に分けて指

導しています。その中に「会(かい)」と「離れ」というのがあります。これらの言葉が仏語の「会者定離」に由来するということを知っただけでも、私は弓道を習って良かったと思っっています。私はすでに喜寿を迎えました。これまで幾つかの良き出会いに恵まれ、また一方悲しい別れにも逢いました。しかし深い意味で「会者定離」の思いをしたことはさほどございません。深い意味でという時、私は懐かしい思い出以上に、忘れ難い恩愛を受けたことを挙げたいと思いません。

人は一生の間には、多くの場合、「袖触れ合うも多生の縁」にあずかるのではないのでしょうか。私も過ぎ来し方を振り返って見た時、こうした出会いが多くありました。しかし芥川が『侏儒の言葉』の中で言っているように、忘れ難い出会いには、運命的必然性を感じます。

運命は偶然よりも必然である。運命は性格の中にある」と言ふ言葉は決して等閑に生まれたものではない。

(文壇第三回卒・英米文学)

同窓会に思う―師弟の関係―

佐藤 俊 英



学校に勤めていると当然のことながら年々師弟関係は拡大していく。ここでいう「師弟関係」は今の立場が「師」であつてのことだが、しかし翻ってみると私自身も「弟」であることも事実だ。

今夏、かつて勤務していた倉敷南高校の同窓会、現在勤務している玉島高校・高女の同窓会、

大学時代の同窓会に出席し、教え子の活躍している姿を嬉しく思い、本校が同窓会の皆様の支えによって成り立っていることを肌で感じ、久しぶりにも恩師、先輩と再会することができ、いずれも楽しいひと時を過ごさせてもらった。同窓会は師と弟、弟と弟を繋ぐ場であった。

師弟関係で思い出するのは、昨年四月に吉備路文学館で催された特別展「阿藤伯海の文学と藤門の書生たち」での「恩師『阿藤伯海』を語る—阿藤伯海先生と私共—」と題して行われた元日銀総裁の三重野康氏の講演である。級友清岡卓行の『詩礼伝家』の一節を引用しながら、先生のもとに集まった諸氏の紹介と交流を語られ、先生を敬愛してやまない人々の思いが、旧制高等学校の雰囲気とともに伝わってきたのである。

師を敬愛する思いは私他者には劣らないつもりである。しかし大学の同窓会で恩師が唐突に夏目漱石の『坊っちゃん』を話され始めたのには驚かされた。失礼ながら、唐突というのは、トーマス・マン一筋に研究なさってきた先生から漱石はまず出てくるはずがないと思ひ込んでいたからである。

先生は「あくまでもこれは接統法第一式での話ですが」と前置きをして、『坊っちゃん』は愛媛県松山の話で知られているが、実は山口が舞台だった、小説中の「イナゴ」騒動は山口中学校で実際に起こった寄宿舎事件が下敷きになっっているし、作品に出てくる堀田こと「山風」のモデルは漱石が成立学舎で数学を教わった隈本有尚であり、隈本は当時山口中学校の教頭であった、以上のことから考えると、『坊っちゃん』は「四国辺の」ではなく「中国辺のある中学校」の話だったであろうのにと。

残念ながら漱石を詳しく知らない私は、半信半疑のまま先生とお別れした。そして『坊っちゃん』をまた読み、このことについていくらか調べてみると、先生のおっしゃることがまんざら嘘でもない（失礼！ 事実、漱石は山口中学校からの招聘を断っているし、松山中学校の印象を「平穩にて生徒も大人なしく」「可愛らしきものに御座候」と書簡に記している）ことを

知って、先生の唐突さがかえって新鮮な驚きとなったのである。

この話がどこまで確認ある話なのかはわからないが、先生は私に快い衝撃を与えてくださった。佐藤一斎が「少而学、則壯而有為。壯而学、則老而不衰。老而学、則死而不朽」と書いている通り、いくつになっても学びは終わらない。そしていつまでもたつても弟は師から学ぶことが多く、その溝は埋めがたい。生徒が何かを発見してはとつとするような授業ができたらどんなに素晴らしいだろう。私も夏の同窓会で皆様からいただいた活力を日々の授業に生かしていきたいと思う。

（注）阿藤伯海 一八九四—一九六三。
岡山県浅口市郡六条院村（現・浅口市）生まれ。
東京帝国大学文学部西洋哲学科卒業。法政大学、第一高等学校教授。漢詩人。

※本稿は岡山県教育委員会『教育時報』二〇〇九年一月号に掲載されたものに加筆しました。
（文壇第二九回卒・ドイツ文学）



大学内風景

生きるヒント

齋藤 恵美子（旧姓相本）



原稿依頼が来て、正直困りました。卒業してから十数年、研究室にも同窓会にも一度も顔を出さず、実家に送られてくる会報も斜め読み、今回開催された第八回総会も、同期生がいなかったら受付を素通りしようとしてコソコソ覗きに行っていた不真面目な卒業生なものですから。（幸い、受付にて同期生に声を掛けられ、無事会場へと潜り込み、その結果寄稿という大役を仰せつかりました。）立派な文章は書けないよ、と半ば及び腰で引き受けたのです。

ところで、同窓会出席というのは、中々に難しいものです。他人との比較に意味がないことは頭ではわかっていても、ある意味「私って今こうなのよ」というプチ自慢から逃れられない、と思つています。私の場合、結婚もせず、期間限定や派遣社員として働いていましたが、時間もなし、お金もない。気持ちにも余裕がありません。

しかし、そんな私も結婚をしました。やっぴー。ところが、改姓や遠くへの転居なんてへっちゃら、とお気楽に考えていたのに、自分を取り巻く劇的な環境の変化についてゆけず、予想外のダメージを受けてしまったのです。「社会とは何ぞや」どころか、社会から切り離されてしまった感覚。自分って社会の何の役に立っているの？ 完全に迷子です。「誰か助けて」と、見栄も張れない状態で、同窓会に参加してみようと思ひ立ったのは、何かに属していたかったのだと思います。人はやはり、社会性の生き物ですね。

さて、実際に出席してみよう。総会では同窓会

運営の裏側を知り、講演会では埋もれていた知的好奇心を掘り起こされ、懇親会では旧知の方々と情報を交わしたりして、更に講師のお二人とお話したいの、勇気が出なくて自分の殻を打ち破ることができませんでした。学生の頃は見ず知らずのお宅にアンケートに伺う怖いもの知らずのパワーがありました。社会に出ると、その人のオーラが少しは理解できるようになり、気軽に声を掛けることに躊躇いが生まれてしまいます。新しい関係が築けたのに、勿体無いですね。けれども、同期生の連絡先や、また集まる予定を覚えてきたことで、昔の絆を結び直すきっかけが見えてきたようで、自分が今社会から離れていることに寂しさを感じながらも嬉しさに浸りました。

そして、生きるヒントをもらった様な気がします。近所ではちょっと言えないなって話をして楽になってみたり。「久しぶり」「元気？」お決まりの挨拶や、ただ単に懐かしい顔を見るだけで、出席して良かったなってじんわり元氣になれたのです。そこで。結論はやっぱりそこか、と言われるのを承知で。

皆さん、同窓会に顔を出してみませんか？
（人文第一三回卒・社会学）

山口大学のひまわり

許 恵 玉

日本に来てすでに三年、山口大学を卒業してもう半年以上経ってしまいました。大学四年の時、あこがれていた日本に留学することに決まり、複雑な手続きを通して、山口大学に来ることになりました。アルバイトをしていた会社の日本人の同僚から、「山口？山口大学ならやめたほうがいいよ。田舎だよ」と言われ、来る前から不安でいっぱいでした。ついに、二〇〇六年一月三日、来日しました。

私を受け入れてくださった先生は、人文学部、言語文化学科の林伸一先生でした。先生はわざわざ新山

口駅まで、迎えに来てくださいました。先生の研究室に着いたら、何よりもドアに貼ってあった「留学生大歓迎」という大きい字が印象深かったのを覚えてます。「きっと留学生に気を遣ってくださいる先生だ」と、心から嬉しく思いました。そのとおり、市立図書館を案内して下さったり、講座がある時も連れて行ってくださいました。

数日間、山口のあちこちを回っているうちに、来る前の不安はいつの間にかさっぱりと消えてしまい、山口が好きになってきました。静かだし、きれいなところだ、こここそ勉強するには一番いいところだと思えました。

最初の半年は、研究生という身分で、林先生の下で、勉強しました。周りの学生から、「林先生は普段は優しいけど、いざ論文に入ったら鬼のようだよ」と聞きました。最初はあまり意味が分かりませんでした。二、三ヶ月くらいして、自ら実感しました。論文に対する要求は高く、指導中は厳しくて怖いくらいでした。最初は、先生の厳しい指導で、ストレスがたまるばかりでした。そのたびに、「厳しい先生の下で勉強するからこそ、もっと成長できるんだ」と自分を励ましながら、頑張りました。

大学院一年の終わりにくらのことでした。林先生に「アンケート調査を集計してくれないか」と頼まれました。最初はイヤだと思いつつ、するしかなかったのです。しかし、それが一回だけで、済みませんでした。二回目、三回目に頼まれた時は、自己主張が強く、気持ちを隠すことができない私は、ついに我慢できず、いやな顔をしながら「まだですか」と文句を言ってしまいました。その時、先生から「何かしなさい」と言われたら「はい」と答えてくれる。そんな文句言わぬの」と言われました。「なぜ、自分のことでもないのに、しなきゃいけないの」と思いますが、不満いっぱいでした。

大学院二年になり、就職活動が始まりました。始めて会社の説明会に行った時のことでした。自信満々で、説明会に行き、会社のリーダーから、いろいろ説明を聞きました。その中に「求める人材」に対する条件もありました。その一番目の項目が「YES」で仕事を始める人であったのです。それを見た瞬間、頭が真っ白になってしまいました。すごいショックを受けたと同時に、恥ずかしくてたま

りませんでした。

論文の指導だけでなく、日本社会に適應するようになり、指導くださっている先生に不満を感じていたのです。自分のためだというのでも分ならず、文句まで言った自分がイヤになってしまいました。そのことをきっかけに、もっと「日本文化」「日本人の行動様式」を勉強しなければいけないと思いはなく、自分が研究している「日本文化」を自分の行動に移さないと研究した意味がないと思いはした。その後から、林先生の言葉もちゃんと自分の心に刻んでおきました。

今になって、振り返ってみると、そのことがきっかけで、勉強になり、成長できたので、林先生に「ありがとうございました」の一言だけでは、気持ちを表しきれないくらいです。二年半の指導を感謝し、人文科学研究科に感謝しています。その間、私をはじめ、留学生をご支援くださった鴻文会にも感謝し、山口、山口大学に来てよかったと思っています。

(大学院第二三回修了)

※許さんは平成二〇年度鴻文会留学生奨学金事業により、奨学金を授与された留学生三名のうちの一人です。

研究室同窓会報告

考古学研究室同窓会

村田裕一

平成二二年一〇月一七日土曜日、秋の京都で同窓会が開催されました。考古学研究室には正規の同窓会組織はありませんが、考古学専攻の卒業生・修了生と、学生時代に何かとお世話になることの多い山口大学埋蔵文化財資料館の関係者が集まり、不定期開催で同窓会を行っております。今回は、平成一九年に続いて二回目の開催となりました。当日は四五名が集まり、近

藤喬一先生、中村友博先生を囲み学生時代の思い出話に花が咲き、和やかな楽しい一時を過ごすことができました。

なお、今回は開催のご案内を郵送で行いましたが、連絡先不明の方も多数おられました。今後ともこのような研究室関連の行事に際してはご案内差し上げようと思っておりますので、住所変更あるいは郵送希望がございましたらご連絡いただければ幸いです。

連絡先

村田裕一

〒七五三―八五四〇

山口市吉田一六七七一 山口大学人文学部

h-murata@amaguchi-u.ac.jp

(人文第一〇回卒・考古学)

社会学研究室同窓会

第三回社会学同窓会総会開催される

林田徳夫



社会学同窓会

社会学同窓会の第三回総会は、平成二二年六月六日土曜日、山口市湯田の防長苑で、午後

四時より開催されました。現教員からは、小谷典子先生、横田尚俊先生、高橋征仁先生にご出席いただき、同窓生は一六名の出席となりました。

出席者は、昭和一九年卒業の住吉様、松崎様、宮川様他、平成一四年の卒業生まで、年齢層は幅広いものとなりました。また、東は、滋賀、兵庫、広島県、西は福岡県と遠くからお集まり頂きました。

総会は、午後四時から、会長挨拶、平成二〇年度収支決算報告・監査報告、研究室近況報告等が行われました。平成二〇年度には、同窓会の三〇周年記念事業として研究室図書整備費の寄付を行っており、横田先生から教育図書購入リストの報告をいただきました。

その後、場所を移動して交流会となり、乾杯、歓談、各自の近況報告となりました。近況報告は、参加者それぞれが、順次行ないました。仕事の話、子どものお話、健康のこと、孫のこと、思い出話、幅広いお話が繰り広げられます。時間も長短あって、楽しく聞くことができました。今回は、飲み放題のコースがセットしてありましたが、皆さん、歓談が主で、飲み物の売れ行きは少なかつたようです。

同窓会の終了は、午後七時頃、外はまだ日が残っておりまして。山口市内のホテルは、五月下旬から六月上旬が最盛期です。先生方と一緒に錦川に沿って廻り(上流は五十鈴川になります)、一の坂川まで、歩いて移動しました。日暮れを待ち、ホテルの飛びはじめのの待ちました。市内に住んでいても見に来ない年もありますが、久しぶりにホテルの乱舞を楽しみました。なお、ホテルの写真も何枚か撮ってみました。ここに掲載できるものはなりませんでしたが、(暗闇の中の点で写っています)。

社会学同窓会の総会は、毎年六月の第一土曜日に開催されることが恒例になっています。東京、大阪など各地の同窓会支部で開催されることもありますが、山口市の開催は、天然記念物のゲンジボタルの時期と重なります。是非、多くの方々の参加をお待ちしております。

(人文第一回卒・社会学)

独文研究室同窓会

岡 光 一 浩

第八回鴻文会総会が行われた八月二日、全体の懇親会後の午後七時より、人文学部の本田義昭先生のご尽力によって、独文同窓会が湯田温泉の翠山荘で開催されました。出席者は一〇名、教員の出席は旧の渡辺信生先生と私（岡光）、現の本田先生の三名で、いつもご出席いただいていた中野安久先生は、今回、体調を崩されてご欠席され、懐かしい中野節を拝聴できなくて誰しもが至極残念な思いでした。卒業生の出席者は、名古屋、大阪、岡山、広島、長崎からそれぞれ一名、山口から二名でした。今回は、残念にも、多くの卒業生のお顔を拝見することは叶いませんでしたが、その分、全員親しく歓談できたように思います。私自身、卒業生のいろいろなお話を伺いながら、夢と現実、現実と夢とのあわいを行き来でき、幸せな時を過ごすことができたように思います。それは、彼らの学生時代の思い出にかつてのことを思い起こされて過去の懐かしさに浸りながらも、同時に、彼らの信念をもったしっかりと話しぶりや、社会で立派に成長されたその堂々とした現実の姿を目の前にするという、二つの違ったものが交錯する、なんとも不思議な時間空間でした。過去を懐かしみつつも、時は成長を生み出すのだということを実感させてくれたこの卒業生との出会いは、私にとって、まさしく充実した、本当に幸せな瞬間の連続でもありました。

一次会でお別れするのが忍びなく、また、誰しもが懐かしい山大・山口には格別の思い入れがあるらしく、その後、どの足も自然に湯田の繁華街に向かい、再び、酒を酌み交わしながらの歓談となりました。そして、日が変わっても、懐かしい話の花は咲き続けましたが、夜中の一時過ぎ、外はどしゃぶりで歩くのもままならない中を、足早に、忍びないお別れをすることにしました。

でも、私事ですが、その後、まだ話足りないらしい二人の卒業生が私宅までやってきて、夜を通しての、酒を酌み交わしつつ眠りつつの朝までの会話となりました。さすがに疲労困憊した私は、いつまでも続く会話にピリオドを打つべく、早朝、彼らを（翠山「荘」ではなく）山水園の翠山の「湯」に連れ出し、心身ともリフレッシュしようとしたのですが、ここでも話が尽きなく、名物の山口料理をご馳走し、新山口駅まで車で送り届け、やつとお別れということになりました。それほどに、彼らの山大愛・山口愛は凄まじいものだったのです。また、お会いできますように。

（文理第一四回卒・ドイツ文学）



大学内風景

鴻文会「賛助会員」の制度に

各位のご協力をお願いします

鴻文会活動は、実質毎年入学される新入生がご入金下さる「終身会費」（二万円）、合計一九〇万円をもとにして行われます。

鴻文会はこの二八年の間、同窓会総会の開催、名簿管理、会報発行、ホームページ管理などの活動を行い、最近では留学生への奨学金支給事業を開始し、活動も多様化しております。これらの活動を支える資金は、昨今の厳しい経済状況もあって、決して安心できる状態ではありません。そのような中であって、ここ数年、卒業生会員や元教員の皆様から多額のご厚志をいただき、本年度開催の諸活動の資金に充てることができました。ひとえに皆様のお力添えのためでございます。

活動を支えて下さった方々のお名前を左に記してお礼に代えさせていただきます。

なお、本年度も、賛助会員について、引き続きお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

加入者名「鴻文会」郵便振替口座〇一五〇〇一四一五九〇二」と記した振替用紙を同封しております。それをお使いいただき、一口千円のご寄付を、よろしく願います。

平成二〇年度賛助会員（順不同 敬称略）

- 後根弘子、岡村君子、内山宣子、弘中稔悟、伊藤英城、吉武官三、原 早苗、井上真理子、井上基子、井上範子、鈴木百合夫、後藤真里、山本直和、田村浩三、山本 力、岩永逸郎、福江俊喜、藤林容志、笠井靖子、住吉隆義、高下洋一、時浦恭三、松元真佐子、山本慎太郎、中村あけみ、鈴木量子、松下富子、中野文男、藤井美枝、川邊貴弘、奥嶋明子、近藤千鶴子、田中伸、藤本千晶、大西勝之、伊東敬一郎、大港章子、梅田 正、小野衣代、山本公吉、山本啓子、池田厚子、米屋廣志、田中弘規、石川哲也。
- ご協力ありがとうございました。

■鴻文会 会員名簿利用規則■

- 一、会員名簿の更新（新規入会、異動に伴う）と保管は事務局で行う。
- 二、会員名簿は会員に限り開示することを原則とする。
- 三、会員名簿は、会員相互の親睦、会の発展を目的とした利用に限り使用することができる。
- 四、会員名簿の開示は、直接に事務局で求めるか、郵便またはファックスで申し込み、事務局は、申し込み者が会員であることを確認して会員名簿を送付する。これにかかる経費は利用者が負担する。
- 五、会員名簿の開示申請者名簿（利用者名簿）を作成し事務局で保管する。

《住所変更連絡のお願い》

毎回たくさんの郵便物が返却されてきます。
住所に変更があった場合はご連絡をお願いします。

鴻文会事務局 Fax: 083-928-4527

E-mail: fycsf998@ybb.ne.jp

鴻文会ホームページの紹介

鴻文会ではホームページを作成して情報発信を行っています。公開は平成14年ですが、平成19年にバージョンアップしてからは、年数回のペースで定期的に更新しています。現在、コンテンツはそれほど多くはありませんが、会長挨拶・役員名簿などを掲載しております。新着情報としては、鴻文会関連・人文学部関連・各研究室同窓会などのコンテンツを準備しております。その他にも、会報「鴻文」バックナンバーのPDFファイルをダウンロードすることが出来ます。また、掲示板も用意しておりますので、会員の皆様の情報交換にお役立ていただければと期待しております。掲示板開設当初は利用も多かったのですが、最近は書き込みがほとんど無い状態が続いております。是非ともご利用いただければと存じます。



URL: <http://homepage3.nifty.com/koubun/index.html>

鴻文会ホームページは、今後は、ダウンロードできる会報バックナンバーの増補や写真コーナーの刷新など、コンテンツの充実に努めて行きたいと考えております。また、会員のみみなさんからの情報をいただいたり、あるいはご要望にお応えしたりといった形でも、拡充して行ければと存じます。是非とも一度ご覧いただき、何卒ご協力のほどお願い申し上げます。

URL: <http://homepage3.nifty.com/koubun/index.html>

(鴻文会ホームページ担当)

編集後記

今年もたくさんの方々の世話になりました。とりわけ、今年は総会の年でした。お忙しい中、総会にご出席いただいた丸本卓哉学長、湯川洋司人文学部長をはじめ大学関係者の方々、合同開催をいただいた鴻理会をはじめ他学部同窓会や鴻南会の方々、渡辺信生・関一雄・末松壽先生をはじめとする恩師の先生方、記念講演をいただいた原早苗さんをはじめ同窓生の皆さま、有難うございました。心からお礼申し上げます。また、今回、総会号として編集いたしました会報第二九号に玉稿をお寄せいただきました方々にも、心からの感謝を申し上げます。何卒、新役員による最初の大きな出発であります。当会報に、ご批評・ご意見をいただきますよう、そして、来年も引き続きよろしくお願いいたします。なお、今回の会報は、編集委員の渡邊早苗、村岡睦子、池田容子、大谷泰子と、副会長の北川健、宮藤隆夫、会長の岡光一浩が協議を重ね、事務所の小野早苗さんに協力をお願いしながら作成したものです。

(岡光一浩)

編集委員から一言申し上げます。

毎年届く鴻文会会報、のんびり読んでいた側から作成する側になるなんて、思ってもいませんでした。若葉マーク付きの編集委員ですが、皆さんに楽しく読んでいただけるように頑張ります。

(渡邊早苗)

この度、初めて鴻文会の会報作りに参加させていただきました。手探りの状態の中、同窓生や関係者の皆様方のご親切な対応のお陰で、無事に完成の日を迎えることができました。この場を借りて心より感謝申し上げます。

(村岡睦子)

昔、印刷所でこの字の大きさを一六ページのものを作るのは大変な作業でした。しかし今回、電子媒体の原稿があれば、あっという間にできることを知り、技術の進歩に唖然とし、そして、感謝しています。

(大谷泰子)

お陰様で、編集作業を通じて自分の出身コース以外の方々（皆様本心に素敵な方ばかりです！）とも交流ができました。そして、山大への愛着が更に深まりました。ご縁の輪が今後より一層広がるようにと願っています。

(池田容子)



編集スタッフ

同窓会事務所での会報作成の打合せ風景です。月曜日から金曜日の午後一時から五時まで、この同窓会事務所に、事務所の小野さんが勤務していらっしやいます。山口大学付近にお越しになることがありましたら、是非お立ち寄り下さい。

最後になりましたが、会員の皆様のご健勝と一層のご発展をお祈り申し上げます。